
The eyes of unusual talent

不動鮮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The eyes of unusual talent

【Nコード】

N4802Q

【作者名】

不動鮮華

【あらすじ】

どこにでもいるような普通な少年淵宵煌真は、エリートしか通えない学校へ合格してしまった…

その学校は異能の目を開発する学校だった。

第一話 Beginning

ジリリリリリリ…

目覚ましとともに目をさます。

目を覚ましたのはいいものの、寒くて布団から出たくない…

このまま2度寝でもする…か…

はっ

「今日は入学式だった!!」

俺としたことがいつものように2度寝してしまうところだった。

俺、ふちよい こうま淵宵煌真は今年で高校1年だ。

どこにでもいるただの15歳一般男子だ。

ただの一般男子のはずなんだが、なぜかエリート中のエリーートの通う特別高に受かってしまった…

毎年中学卒業する奴は大抵受ける検査に見事Sランクで合格してしまっただの…

その検査の内容は『異能の目の力を持つ資格を持っているか』の検査だった。

もちろん今の俺は何の変哲も無いただの黒い目だ。

入学したら何らかの開発をうけるらしい…

らしいというのは、ただ聞いた話だからだ。

詳しいことは入学してからその後の授業で教えてもらうらしい。

おっとそんな説明をしている場合じゃない。

早く学校に行かなきゃ！入学そうそう遅行だなんて格好がつかないぞ。

「皆さん入学おめでとう。私は不動鮮華ふどうあやかです。みなさんの担任になることになりました。これからよろしくね」

いかにも親しみやすそうな先生が担任になってくれていた。

よかったあ……ごついおっさんとかだったら登校拒否するところだったぜ。

「では、早速ですがみなさんにはこの学校の言う、『開発』というものを受けてもらいます。『開発』というのは、皆さんの両目に特殊な光を当てます。別に体に害は無いから心配しないでね。そして数時間後にどちらか片方の目が変わっていきます。その色によって、あなたの能力が決まってきます。詳しいことは、また後で話しますね。」

そういつて、担任の鮮華先生は出席番号の1番にあたる少年Aを連れて何処か行ってしまった。

俺は淵宵の「ふ」だからまだまだか……

それでは暇だからこの学校について説明をしよう。

この学校は地上からある程度離れた地下にある。不審人物からデータを盗まれないようにするためだそうだ。入学したばかりだからこんなことしか知らないが、そこは我慢してくれ。と、窓はあるが外は壁だらけの方をみながら黄昏ていると、

「おっす煌真君。また同じくらすじゃん。」

そういつて話しかけてきたのは、中学のとき同じクラスだった『草^{くさ}神^{がみ}早^{さなえ}苗^め』だ。

昔からこいつはやけになれなれしい。まあ、別にいいけど。

「そういえば、お前も受かってたんだなこの学校に」

「そういえばとは失礼だな。この前話してたじゃん」

「そうだったか？ ああ、そんなこともあったなあ……」

「何懐かしいな的なノリで思い出してるの！？ ついこの前だよ！」
そんな適当に会話をしていると、気になる質問をたずねることにした。

「それで、例の開発の時の光どうだった？」

「へえー、何？ 怖いのか？」

いやらしい目でこちらを見ながら聞いてきた。

「べ、別に怖くないもん。ただ、お前のことが心配だったから聞いただけだもん」

「もんで…」

「それでどうだった？」

「別のなんともなかったよ。私も最初は怖かったけれど、ピカって光って眩しいと思ったたら終わってたよ」

それをきいて俺は胸をなでおろす。

「やつぱり怖かったんでしょ？」

「だからこわくねえって！」

そんな無駄話をしていると、

「淵宵くーん？淵宵煌真くーん」

と、先生が俺を探していた。

おっと次は俺の番か。そう思い俺は教室を出た。

第一話 B e g i n n i n g (後書き)

閲覧ありがとうございます!!

今回が初の投稿となりました。

基本的に私は面倒な作業はしないのですが、小説を書いてしまいました。

次回の投稿は未定です。

グダグダな感じで進めていくので、気長に待ってくださると幸いです。
よろしければ次回作も見てください。

第二話 And the unusual talent? (前書き)

暇だったんで第2話を投稿させていただきました。
だらだらと書いたんでまとまってないです。

読んでくださった方、よければアドバイス等お願いします。

第二話 And the unusual talent?

俺も無事に目に光をあてる作業が終わり、変化が起きるまで教室で先生の説明が行われていた。

因みに変化とは、目に様々な色がつくことを指している。詳しいことは今先生が言っていた。

「あと数時間もしたら、皆さんの目の色が変わってくるはずですよ。因みに私は、青色です。青色の能力は水を操る能力です。ですが、私は能力者と言ってもレベルEの落ちこぼれだったので、こうやって皆さんにいままで学んできたことを教えることしか出来ません。今では、レベルC以下の子は受からないようになっていきますので、私のような落ちこぼれが出来ることがありません」

そう言って先生は苦笑いを浮かべる。

まあ、仕方ないと正直思う。先生が学生時代（年齢は知らないが、レベルC以上だけを取るようになったのはつい最近だから、今は20代前半だろう）は、今とは違っていて正確にレベルを調べる装置はまだ完成していなかった。だから先生のような…こう言うのもなんだが、先生のよな落ちこぼれは少なくない。だからといって、外の世界（地上）に出してしまったら拉致されて能力を調べられてしまうかも知れないので、今までの卒業生は先生のように教師になったり、力に恵まれているものは学園から出された任務を行うことになっっている。

「能力は水の他にも、赤い目は『火』、緑が『風』、黄色が『雷』の4つが一般的なものです。ですが、稀な能力もあって、『未来予知』や『ステータスリード』という相手の能力を調べる能力というものもあります。こういう能力は任務には向かないので、占い師や医師になることが多いです。他にもたくさんありますが、まだ発見されていない能力もあるかもしれませんね」

そういうった説明を聞いていると、

「おや？皆さん続々と目の色が変わっていますよ。ふふふ、あとで鏡を見てみては？」

楽しげに先生は言っていた。

そして休み時間――

「おい、早苗！」

「はいはい」

「お、お前は黄色なんだな」

「そうなんだよ。珍しい能力が良かったんだけどなあ……ん？」

不思議そうに早苗は俺の顔をまじまじと見つめている。俺は戸惑いながら、

「な、なんだよ」

「煌真：ちよつと言いくいんだけど……」

「何だよ、はつきり言ってくれよ」

「じゃあ言うけど、驚かないでよ……」

早苗は重い口を開けて、

「あんた、何も色がついてないよ」

ん？なんですよ？なんと言いましたか？

色がついてないだつて？そんなバカな。だつて俺はレベルSなんだから？なにか珍しい能力になつていてもおかしくないはずなのに！

俺は真相を調べるべくトイレへ走った。無論鏡をで自分の目を見るためだ。

「あ、ちよつと待つて！」

早苗が何か言っているがそんなことを気にしている暇は無い。

そして俺はこのあと絶望のどん底に叩き落とされた。

第二話 A n d t h e u n u s u a l t a l e n t ? (後書き)

次回は早ければ明日、遅くても来週中には投稿したいと思います。

第二・五話 Risk approach (前書き)

明日投稿すとか言いながら、今日のうちに投稿します。
暇だったんです。
ではどうぞ

第二・五話 Risk approach

「
あまり聞かない言語でその女性は言っていた。」

「
綺麗な白髪の少女は別れの言葉を継げ、飛行機に乗った。」

「
（ふん、何が異能だ…そんなもの生まれたときから宿している）」

少女はつまらなそうに、退屈そうに、馬鹿馬鹿しそうにしながら外を眺める。

その頃煌真は項垂れていた。

（レベルSが出たのは機械の故障のせいだったのか…？はあ、これじゃ俺はものすごく恥ずかしい人じゃないかよ…）

これから迫る危険をまだ知らない、煌真の能力の招待も…

第二・五話 Risk approach（後書き）

サブストーリーなんで短いです。

文才が欲しい…

第三話 S u d d e n l y s t u d e n t s (前書き)

いろいろな案が出すぎて頭がごちゃごちゃしてしまい、変な文章になってしまいました。

第三話 Suddenly students

その後も何回か検査を受けたが結果はみな等しくSランク。

（一体なんなんだよ…）

今は普通に授業を受けているが、能力を扱う授業については見学している。

授業をさぼるわけにはいかない。

そんな毎日を悲しく過ごしている…

煌真がこの学校に入学して1週間ほどがたって、

「今日は新しい皆さんと共に勉強をしていく新しい仲間が増えます。別に転入とかという訳ではなく、前からこの学校うに来ることは決まっていたのだけでも、何せ外国から生徒を取るようになったのは今年からだから、いろいろとごちゃごちゃしていて、皆さんと1週間遅れで新しい生徒が増えます。では、入ってきてください」と、先生が言つて少し間を置いてドアが開いた。

いくらいろいろと絶望している俺でも気になったので見てみると、その生徒は綺麗な白髪で目は赤眼、顔立ちも整っていてとても綺麗な女子だった。ただ、右目に眼帯をしていて怖いオーラがでていた。

「この子が君達と同じ新入生のヴェルラ・エリクスさんです」

先生の短い紹介の後、

「ヴェルラ・エリクスだ。よろしく」

と、短く男らしい自己紹介をした。

「では、席の空いているところは…じゃあ、煌真くんの隣に座って

ください」

先生がそう言った後無言で俺の隣の席に座った。

「よう。俺は淵宵煌真だ。よろしくな」

「ああ」

と、とてもとても短い会話が終了した。

（なんだよ…付き合いの悪い奴だな）

再度会話を試みしてみる。

「やっぱり炎を操るのか？」

「当たり前だ。一目瞭然だ」

…会話終了!!

さすがに苛立つてきた俺は、

「おい、そんな態度はないだろ——」

「耳障りだ。黙れ。私に構うな——？」

そういうながらこちらの方へ振り向く。そして不思議そうにこちらを見てくる。

「おい、貴様。能力はなんだ？」

痛いところつかれてしまった。だが聞かれたからには答えるしかないだろう。

「実は俺には——」

絶妙なタイミングでチャームがなった。仕方なくショートホームルームの挨拶を済ませたあとに話しかけようとしたら、

「ヴェウラさんは何処から来たの？」「なんで眼帯してるの？」

などと質問攻めにあっていた。

（まあ、仕方ないか）

そう思い、次の授業の準備をした。

第三話 S u d d e n l y s t u d e n t s (後書き)

もっと分かりやすく書きたい…

第四話 S t a r t T r a i n i n g (前書き)

資格を取る試験やら学年末テストやらで小説がなかなか書くことが出来ませんでした。

グダグダな脳みそで一生懸命書きました。

第四話 S t a r t T r a i n i n g

しかし見学はつまらないな。ただ見てるのにはもう飽きてきた。はやく原因解かないかな…

などと考えている間に授業が終わってしまった。

教室に戻ろうとしていると、

「おい。お前。」

なんか聞こえたが気のせいだろう。

「そこのお前だよ！無能力者！w」

さすがに今のwには苛立ちを感じ振り返る。

「なんだよ？」

「なんでいつまでもここに居るんだよ？無能はさっさとここから出て行ったらどうなんだよ？w」

俺は無能力者ではあるが、無能では無い。気が長い方ではないため、ついつい喧嘩を売ってしまった。

「あーあ、何処の世界にも居るんだよな。自分を棚に上げて自分より劣って居る奴を平気で見下す奴が。こんな醜いやつが居るからいつまで経っても世界は綺麗になりやしない」

喧嘩を売ってみたものはいいいものの、実際に自分が劣っていることを今思い出してしまった。

「なめた口きいてんじゃねえよ！雑魚が！」

どうやら相手はパイロキネシスだったらしく炎が目の前に飛んできた。これはあつたら軽い火傷じゃすまじやないな、と、本気で焦ったとき、

ドオン！

なんかすごい音が聞こえた気がしたが、いまはそんな場合じゃない！必死に醜い姿になった後の生活をどう過ごすか一生懸命考えていたら、

「……………ん？なんも飛んでもない？」

恐る恐る顔を上げてみると、

「お前は確か…転校してきた新入りじゃねえか。これはどういうつもりだ？」

俺の目の前には転入してきたばかりのヴェルラだった。ヴェルラは俺の前に立って同じ炎で相手の炎を消し飛ばしたようだった。

「ふん。いい年こいて弱いものいじめか？まったく、貴様のような低脳な人間が考えることはよく分からんな」

今度はヴェウラが挑発をしていた。

「なんだと！」

すっかり血が頭に上りきってしまった相手は炎を飛ばしてきた。

「ふん」

ヴェウラはやれやれといったような感じで、気だるそうに相手に同じ大きさの炎の玉を飛ばして相手に突っ込んで行った。

炎の玉は見事に相手の玉に当たり爆ぜた。

「ゴホツゴホツ、何処行きやがった？」

相手はあからさまに玉を飛ばしまくっていた。

「いったいお前は何処を見ている」

そう聞こえたときにはもう遅い。ヴェウラは相手の後ろに回りこみ、関節技を決めていた。

「な！？いつのmいでででで」

「能力に頼りきっているからこうなるんだ。これに懲りたら弱いものいじめなど止めるんだな」

そういつてヴェウラは相手を解放してやった。

「くそつ、覚えてろよ！」

そんな今は誰も言わなさそうに捨て台詞を吐いて走って何処かへ行ってしまった。

「ふー、助かった。ありがとうなヴェウラ」

「貴様も貴様だ。力が無いなら無いなりに体を鍛えたりしたらどうなんだ？」

「ごもつともです…」

「貴様が無能力なのは聞かないでおくが、まあ、精々頑張るんだな、と言おうとしたときにヴェウラがふらついた。」

「おい、大丈夫か？」

「ふん、心配は無用だ」

そう言つてヴェウラは去つていった。

本当に大丈夫なのだろうか…心配だ。それにしてもあいついいやつだったな…最初の会話では冷たかったが、アドバイスまでしてくれて…うん。アイツはいいやつだ。

それから俺は地道にトレーニングを始めた。

「はあ…はあ…」

ヴェウラはふらふらになりながら椅子に腰掛けた。

「なんて無様な姿だ。もう限界とはな…」

ヴェウラは息を整えて自室へと戻つていった。

第四話 S t a r t T r a i n i n g (後書き)

ヴェウラが想像の人物と違うやつになってしまった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4802q/>

The eyes of unusual talent

2011年3月3日10時42分発行